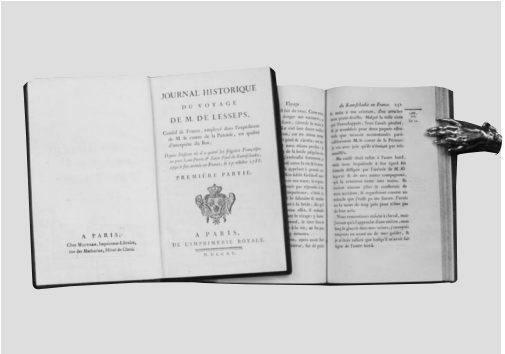

“Journal historique du voyage de M. de Lesseps”
（『レセップスの旅行日記』全2巻）ー本学図書館所蔵ー

1792（寛政四）年にロシア船で十年ぶりに根室に戻っています。その後、根室で死亡した一名を除いて江戸で、十一代将軍徳川家斉（とくがわいえなり）の臨席のもとに老中松平定信の取り調べを受け、この時の口述は桂川甫周（かつらがわほしゅう）が編集し、『北槎聞略（ほくさぶんりゃく）』となって残されています。その後、光太夫は江戸にあった幕府の薬園に住居が与えられ、幕府監視のもとに終生そこで過ごすことになります。

レセップス、艦隊と別れ母国へ
艦隊は消息を断つ

さて、レセップスはカムチャッカの地でラ・ペルーズや艦隊の乗組員らと別れを告げ、それまでの調査記録を携えながらシベリアを横断してフランスに戻ります。このように、遠洋航海中に重要資料を陸路に切り替えて移動させることは当時の海軍の常套手段ですが、彼が無事帰国したことによって、ラ・ペルーズやレセップス自身の航海の一連の記録が書物として刊行されることになるのです。なぜなら、ラ・ペルーズとその艦隊は二度と母港に戻ることがなかったからです。彼らはカムチャッカから南下して南太平洋に入り、サモア諸島で原住民の襲撃を受けるなどして人的被害も出しながら、オーストラリアのボタニー湾（現在のシドニーの南）に入ったことが確認されています。しかし、ここを出港してからの消息は完全に途絶えてしまったのです。

レセップスの日本観は？

パリで『レセップスの旅行日記』が刊行されたことによって、鎖国体制の中で生活していたはずの日本人が、カムチャッカで出会った人たちとして紹介されたのです。提督ラ・ペルーズでさえも、日本海を通過しただけで重要な島々に近寄らなかった日本であり、レセップスにとってもこの地で日本人に出会うということは、想像外の出来事であったのではないでしょうか。

推測の域を出ないまでも、この時代の一流の知識人であるレセップスが持っていた閉ざされた国としての日本観は、マルコ・ポーロの『東方見聞録』にある「ジパング」から始まり、フランシスコ・ザビエル以降のキリスト教布教に関わる書物や、鎖国体制下の限られた交易国であるオランダの人々を中心にして著された書物からの知識で成っていたものと思われます。

レセップスが光太夫たちを見て、それまで持っていた日本人に対するイメージと一致したかどうかはわかりませんが、彼らは異国での厳しい環境の中にあっても、かつてザビエルも称賛した日本人の行動規範としての伝統的な礼儀をわきまえ、船の乗組員として規律も重んじられていたと考えられます。こうしたことから、レセップスも好意的に一行の姿を捉えたのではないでしょうか。この時点でレセップスは、光太夫のその後の行動と運命を知る由（よし）もなかったわけですが、光太夫の意志の強さや指導力を評価しており、彼が将来、困難を克服して日本へ帰ることを予測していたのかもしれません。

このように、『レセップスの旅行日記』には今から約二百三十年前の「海の男たち」の記録が綴られており、フランス海軍の栄光と悲劇の中で、日本の船乗りたちが外国で体験した苦しい歴史の一こまを垣間見ることができるのです。

註

（1）ジャン・レセップスは将来を嘱望された外交官であり、航海の後はヨーロッパ各国へ赴任した。なお、同じく外交官出身でスエズ運河を作ったフェルディナンド・レセップスはジャンの甥にあたる。

（2）Lesseps, Jean “Journal historique du voyage de M. de Lesseps” 2 vols. Paris, 1790. Partie I. pp. 203-211.

参考文献

○桂川甫周著　亀井高孝校訂『北槎聞略：大黒屋光太夫ロシア漂流記』岩波書店，1990年。
○『ラペルーズ太平洋周航記 上・下』　佐藤淳二訳　岩波書店（シリーズ世界周航記 7·8），2006年。

おく　まさよし（司書・図書館事務長兼管理運営課長）